

穂 落ち

自由に生きているつもりでいた。親の言う事も、誰の言う事も聞かず「自分勝手に好きな事を行う」事が単純に自由だと思っていたのです。その結果、私が行き着いた所は刑務所、精神科病院など鍵のかかった生活だったのです。当時は自分の家ならまだしも、友人の家でも、どこでも警察が怖くてとりあえず鍵を掛けていたものです。自分から鍵のかかった所へ向かう自由もあるのですが、私の望んでいた自由とはかけ離れた状況でした。

「生」を説明する時に、その対象である「死」を引き合いに出不入に説明する事が困難であるのと同様なのか、不自由になって初めて自由という事について考える事ができた様に思います。

自由になって初めて自由という事について考える事ができた様に思います。ダルク職員として社会参加するようになって、私が薬物依存症になってしまったものがうかは良く解りませんが…

依存症でよかった

三浦 陽一

(沖縄ダルク・チーフディレクター)

見えてきました。「個人的な成長」「創造性」「人の善意を感じる能力」に加えて「自由(やめる自由)」も失っていたのです。やめたくてもやめられない、何回もやめるけどやめ続ける事ができない。

これが病気であるとWHO(世界保健機構)も言っていたのです。自由を失う病気にかかってしまったから鍵のかかっている所に向かうのかどうかは良く解りませんが…

最近、私は少しずつ自由を取り戻しつつあります。仕事をし、たまに洗濯や掃除をして、家賃や光熱費を払ってとんだかんだと忙しく過しているのに、自由を感じています。今では堂々と警察官に道を尋ねる事ができます。普通の人が普通にできる事ではありますが、普通でなかった私にはありえない事柄だったのです。自分勝手な単純な自由を求め、鍵のかかった所へ向かっている頃は、ドラマチックで刺激的(問題多発)な生活でした。今もダルクにいますので刺激的ではあります。でも、それでも平凡な生活に戻りつつある事で、普通の人が普通にできる自由な事を取り戻しているのです。その上、散々してかしてしまったおかげで失う物もなくなり、人前でゴソゴソと隠さずに自分のしてしまった事を話せる事ができます。薬物依存症になって良かった事の一つです。